

大江首席交渉官代理による記者会見の概要

日時：平成26年10月15日（水）15：00～15：10

場所：内閣府記者会見室

【質疑応答】

（記者）

今回の協議について如何。

（大江代理）

先週木曜日の夜にカトラー米国次席通商代表代行が来て、交渉を再開するための事前準備をして、日曜日から正式に交渉を再開した。カトラー次席との会談を入れると1週間になるし、正式協議になってからも4日間行った。今回は、先程カトラー次席もぶら下がりをやっていたが、確実に着実な成果があった。今まで2日間ぐらいだったが、今回は長い間やり、毎日進展はしていたと思う。ただ、やるべきことが山ほどあるので、これで終わるとということからは程遠い。なので、これからシドニー閣僚会合まで放っておく訳にはいかない。来週キャンベラに行くので、ダルシー・ヴェッター首席農業交渉官に来てもらって、彼女と協議を行う。その後、シドニー閣僚会合には当初予定より1日早く移動し、カトラー次席も来るので、2+2で直前まで交渉を続けようということになった。

（記者）

前回は閣僚で物別れという形に終わり、今回一転して成果があったということだが、その過程で何があり、どういう点で成果や前進があったのか。

（大江代理）

中身の話はできないが、前回、閣僚でああいう形で終わってしまったので、すぐに閣僚で再開という感じにはならないだろうと向こうも多分思っているだろうから、そういう意味では事務レベルで行うことについて、米国側も今まで以上にきちっとしたマンデートを与えた上で交渉できたと思う。日本で行う交渉は時差が正反対なので、1日が終わると夜中のうちに彼女らもフローマン代表に相談していたのではないかと思う。こっちも昼間いろいろ国内で調整できるので、そういう形で少しずつ前に進展していった。

（記者）

マンデートの話があったが、先方の柔軟性というか態度というのは、前回ないしそれ以前に比べると如何か。

（大江代理）

本来、交渉というのは、お互いにいろいろ考え方を出すとそれを受けて向こうから何か出てくるといふ、その繰返しであるが、今までなかなかその形にならなかったのだから、そういう意味ではやっとならぬ本来の交渉らしい交渉になったということではないかと思う。

(記者)

お互いに案を出したというのは、お互いに譲歩案を示したということか。

(大江代理)

こういうところではできるのではないか、これはできないのではないかと、そういうふうに物事を詰めていくということ。

(記者)

そういう意味では、今回の協議でお互いの隔たりというのは着実に詰まってきたといえるのか。

(大江代理)

まだだいぶ残っているが、詰まっているのは間違いない。

(記者)

本日、オバマ大統領と安倍総理の電話会談で、日米間で早期の妥結に向けて連携することが確認されたが、豪州の閣僚会合前に日米間で合意に持ち込もうというスケジュール感はあるか。

(大江代理)

これは交渉なので、いつまでに絶対まとめないといけないというものではないが、シドニー閣僚会合を見ながらそこへ向けてできるだけ進めるということ。

(記者)

同時並行的にということか。

(大江代理)

シドニー閣僚会合での全体のTPPの合意というのは、日米が合意されてないとなかなか進まないということがあるので、そこを目指して日米もできるだけ進めたいということ。

(記者)

今まで八合目、九合目という言い方をされていたが、この1週間の状況如何。

(大江代理)

この段階で何合目と言うのは差し控えたい。

(記者)

甘利大臣とフローマン代表の日米閣僚協議は、今回の実務レベル協議を通じてその準備が整ったのか、それともシドニーに移った後の実務協議でそういうことをするのか。

(大江代理)

シドニーというより、まだ事務的に詰めなければならないことが一杯あるし、今回みたいな交渉を続けることができれば事務レベルであってもまだ前に進めると思うので、先程申し上げたように、キャンベラで取り敢えずヴェッター首席農業交渉官と協議をして、それからシドニーに移動してカトラ一次席も入れて協議するということをまず考えている。

(記者)

カトラ一次席が、今回残された課題はタフな厳しいものであるという話をしていたが、実際のところはどのようにお考えか。また、米国が要求しているのは、自民党や国会の決議を超える範囲のものなのか。

(大江代理)

向こうが要求しているものは、我々は飲めないと言っている。だからなかなか合意できていないわけで、そこはせめぎ合いになっている。

(記者)

まだ非常に厳しい要求をしてきているのか。

(大江代理)

その通り。残っているものは前よりだいぶ少なくなっているが、それは易しい問題から解決していくので、残っているものは難しい。

(記者)

カトラ一次席がぶら下がりでもAPEC首脳会合について言及をしたが、そういったスケジュール感については交渉の中で、お互いの話の中で出たのか。

(大江代理)

APECの話はしていない。シドニー閣僚会合を一つの目安として、そこまでに進めたいという話をしている。

(記者)

毎日進展があったというのは、農産品交渉の焦点となっている牛・豚のセーフガードについてもいえるのか。

(大江代理)

色々な論点があるので、全ての論点についてどこの点がどうだということは申し上げない。

(記者)

カトラ一次席がぶら下がりでも日本側の交渉官に大胆な対応を求めたいという話をしていたが、大江代理からみて日本側は既にそういう姿勢を示しているとお考えか。

(大江代理)

大胆な対応を求めたいというのは、米国が昔から繰り返していることだが、我々は十分柔軟性を発揮してきたので、今の時点で残っている柔軟性はそんなくない。

(記者)

農業の分野と自動車関連の分野という2つのジャンルがあるが、タフで厳しいというのはどちらか。

(大江代理)

両方である。

(記者)

先程何合目かという話が出たが、以前の閣僚会合を含め、今までの中で一番良い状況なのか。

(大江代理)

その通り。

(記者)

閣僚レベルと首脳レベル、これはまた違った役割があるのか。

(大江代理)

首脳レベルでそもそも取り上げるかどうかは何も決まっていないし、首脳レベルで交渉するという話ではないと思う。

(記者)

首脳レベルで取り上げたいという話も出ていないのか、カトラ一次席からも。

(大江代理)

そんな話は一切していない。

(以上)